

名古屋 文化情報

2015
11・12
November / December

No. 365
NAGOYA
Cultural
Information

随想／井上 松次郎（能楽師） 視点／愛知・名古屋の写真家たち
この人と／林 董一（愛知学院大学名誉教授 法学博士） いとしのサブカル／内藤 泰弘（漫画空間オーナー）



2015

11・12

November / December

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 「知る・学ぶ・習う」…その先に。
井上 松次郎(能楽師)…………… 3

視点
愛知・名古屋の写真家たち…………… 4

この人と…
林 董一(愛知学院大学名誉教授 法学博士)…………… 6

ピックアップ
「名古屋を彩る高校吹奏楽部」…………… 10

いとしのサブカル
内藤 泰弘(漫画空間オーナー)…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (現代舞踊家)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽと代表)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品

サンカクノココロ

(2014年/磁土・青白磁釉/作品点数50点の集合体 5m×5m×90cm)

生きる力を磁土と炎で表現
そして進む。



撮影:田中 よしのり

加藤 委 (かとう つぶさ)

1962年 多治見市小名田町に生まれる
1979年 多治見市意匠研究所修了
2013年 第7回円空大賞受賞
内外個展、グループ展その他 多数

「2014年 名古屋市民文芸祭」
(第六五回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
詩の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

名古屋市立滝川小学校6年

堀田真千子

贈りもの

てん。
てんがあつた
まわりにカギカツコがよつ
どまんなかに てん

目立つけど 目立たない
見えるけど 見えない

あるけど ない
つまらないけど おもしろい
ふんだら どうなる?

時間 止まっちゃう? たぶんむり
空 飛べちゃう? できたらいいな
やなヤツ 友達になっちゃう? すごいかも
物 こわれちゃう? こまります
ひみつの道 現れちゃう? 見たいかも

ほん!
ふんでみた

車 うごいてる
ちゃんと 歩ける

走るのが おそい
けいたい こわれてない

道 いつものとおり

あーあ
ふつうのてんだった
ちよつと つまんない
ちよつと がっかり

でも
上を見上げると

夏と秋のあいだの空が
いつものとせんせんちがう空が
とけちゃうような青さで

そんなわたしを
わらつて みていた

随想

「知る・学ぶ・習う」…その先に。



いの うえ まつ じ ろう

井上松次郎(能楽師)

能楽師《狂言方和泉流山脇派》。井上菊次郎家五代目。
祖父の三世 井上菊次郎(初世松次郎)および父の四世 井上菊次郎(祐一)に師事。
東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。
現在、(公社)能楽協会名古屋支部副支部長、和泉流職分会幹事。
金城学院大学・名進研小学校・静岡文化芸術大学 非常勤講師。

今年も《やっとかめ文化祭》が幕を開けます。私こと狂言「福之神」を、今どき流行りのゆるキャラ的な「笑神様」に扮して広告塔を仰せつかり、古典芸能・伝統芸能の祭典として三年目を迎える本年、広く市民の皆さんに周知・定着がなされてきたでしょうか。

この企画を伺った折、私なりの甚だ勝手な心得として、当初、三ヶ年計画であった本祭テーマを「知る・学ぶ・習う」と位置付けて参りました。まず古典芸能にはどんなジャンルが存在するのかという認知を促す《知る》の一年目。その各々にはどのような特徴と繋がりがあるのかを掘り進める《学ぶ》の二年目。そして鑑賞(観賞)するだけに留まらず、自らも体験していただくという集大成《習う》の三年目。

『芸どころ名古屋』。これは元来、庶民が広く浅くでも多分野の芸能・芸術に関わり携わり、更には自身も嗜む事によって培われる、つまりはお素人達を守り育ててきた街。これを以て当地文化、芸どころの「礎」となっています。習う事によって教養も深まり箔も付き、子ども達は礼儀作法をも身に付ける修練の場ともなり。故に一昔前の企業には、謡曲部など部活動も存在し社長・会長職の方々であっても、嗜む事によって交流とステータスを高めておられた時代を記憶しています。近年は福利厚生事情に困ってか、あまり聞き及びませんが。さておき室町以降、こうして能楽をはじめ茶道も華道も舞踊も

長唄も、数多の流儀・流派とそのお家元までが存在する地域でもあります。私所属の「狂言共同社」も、基は町人・商人らお旦那衆のサークル俱楽部的集団。明治維新による混乱期を玄人ではなく素人愛好者が支え、散逸しかけた尾張徳川藩由来の伝書や装束類を共同で管理維持し、そして後世へ繋げてゆく精神。私の祖先もその中心的立場におりました。現在その一部は、それのみに安座する事無く、東西に劣らぬ舞台成果と信用を得るための芸位・芸力の底上げを目指して、プロの楽師としての活動へと展開しています。

子ども達や若者が古典芸能を知らない・興味を持たない、それは彼らの責任ではありません。教えて来なかった親世代の責任。ではその我々親世代とて、若い頃充足に学ばず携わって来なかったのは、更にその親である祖父母世代の責任。このようなスパイラルでは物事は簡単に途切れます。これが「伝承」の面白くもあり怖ろしいところ。教える者と教えるを乞う者、双方の信用と熱意があって初めて維持されていくのです。云わば伝統芸能ならぬ、「伝承芸能」であります。

この機会に知って学んで習って嗜んで、そして今度は市民の皆さんが手本・模範となって、次世代には是非《伝えて》いただきたい。我々も皆さんも、その責任の一端を担っています。

知ってもらえるならば、エビフライの冠だって喜んで被りますぞ。

愛知・名古屋の写真家たち

1848年に長崎で写真機材(ダゲレオタイプ)が輸入されてから170年近く、その間に名古屋は独自の文化を醸成しながら、個性的な写真家たちをたくさん輩出している。そんな愛知・名古屋の代表的な写真家たちを瞥見してみたい。
(まとめ: 森本 悟郎)

まずは殿様から

1850年代は薩摩はじめ福岡・鍋島・福井・松代・大垣・水戸などの諸藩で写真研究が進められていた。そんな頃徳川慶勝(1824~1883)は1849年に尾張藩第十四代藩主となった。

1858(安政5)年、慶勝は「不時登城事件」の咎めを受け、隠居・謹慎を命じられる。この謹慎生活中に写真研究をはじめたとされている。最も古い作例は1861(文久元)年撮影の自画像。翌1862年に長崎の上野彦馬、横浜の下岡蓮杖が写真館を開業し、同年慶勝は赦免されている。

慶勝の写真撮影は行動に制約の多い立場ながら精力的に行われ、例えば1868年に総督として第一次長州征討に出陣の際は、京都・大阪・広島城下を撮っている。慶勝の写真術は湿式コロジオンで、これはガラス板に塗布した感光液が乾かないうちに撮影、ただちに現像・定着するというもの。撮影現場には暗室が必要だった。機材・薬品とともに(おそらく組み立て式)暗室も携行した。

慶勝が幕末から明治にかけて撮った、自身の私的空間や戸山下屋敷・市ヶ谷上屋敷・旧名古屋城・名古屋市中・東京市中など、1000点以上にもなる画像は貴重だ。パノラマ写真やステレオ写真も試み、写真術の詳細な記録も残している。慶勝の写真研究は無聊を慰める類いのものではなく、西欧文明を覗く眼鏡であり、自分の生きた時代を記録するという社会的使命を帯びた行為だったのではないか。

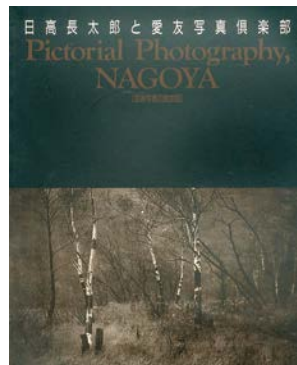
ピクトリアリズム(絵画主義)の作家たち

明治も半ばにはアマチュア写真家が増え、写真団体が結成され始める。1900年代には国産の印画紙や小型カメラも生産され、普及がいつそう進む。高学歴で経済的に恵まれ、芸術への関心が高く、海外事情にも明るいアマチュア写真家たちは、写真を芸術的表現手段と考えるようになる。1904年には大阪で「浪華写真倶楽部」、東京で「ゆふつ社」(1907年から「東京写真研究会」)が結成され、名古屋では1912(明治45)年に日高長太郎(1883~1926)・佐野紫影・山本五郎らが「愛友写真倶楽部」を結成する。その中心となった日高は「東京写真研究会

展(研展)」でも活躍し、1922(大正11)年から死去するまで「研展」審査員を務めている。「愛友写真倶楽部」には松浦幸陽(1891~1938)、大橋松太郎(1891~1941)、益子愛太郎(1882~1968)、榊原青葉(1887~1974)といった有力会員が加わり、ピグメント印画の一種であるゴム印画を駆使して、日本のピクトリアリズム写真界に独自の地歩を築いた。

名古屋アヴァンギャルド

日高が逝った年の末、元号は大正から昭和へ。以来、海外から新即物主義やモホイ = ナジのパウハウス理論、ダダイズム、シュルレアリスムなどが流入し、ピクトリアリズムは陰りを見せる。1937年名古屋の詩人山中散生(1905~1977)と瀧口修造が企画した「海外超現実主義作品展」が名古屋に巡回。それを機に山中・下郷羊雄(1907~1981)・吉川三伸・岡田徹・戸川金雄らが「ナゴヤアバングルドクラブ」を結成。1939年、坂田稔(1902~1974)・下郷・山中・田島二男(1903~2002)・山本悞右(1914~1987)らにより、「ナゴヤ・フォトアバングルド」として写真部門が独立。田島の作品がフランスの美術誌『ミノール』に掲載されるなど、フランスのシュルレアリストとの交流も持った。悞右は山本五郎の子息。2001年東京ステーションギャラリーで「写真展 シュルレアリスト 山本悞右」が開かれ、以後海外での評価が高まっている。



「日高長太郎と愛友写真倶楽部 芸術写真の黄金期」展図録 (名古屋市美術館、1990)



「写真展 シュルレアリスト 山本悞右」フライヤー (東京ステーションギャラリー、2001)

戦後日本の記録者

臼井薫(1916～2010)は寿司屋を営みながら、戦前からアマチュア写真グループで活動していた。北区上飯田の写真店開業は戦後の1947年で、写真活動も再開。1950年、土門拳が審査員となった「カメラ」誌月例コンテストに応募し、年度賞を3回受賞。土門がリアリズム終結宣言をした後も、1956年からはじまった「フォトアート」誌の土門月例に応募して、5年連続ベストテン1位となる。土門スクール最優等生だった。名古屋市内やその近郊に取材した写真は戦後の記録としても貴重な。

今年3月に亡くなった詫間喬夫(1925～2015)は臼井とともに名古屋写真界の重鎮だった。学生写真連盟結成の情報を愛知大学学生の東松照明に伝えたのは早稲田大学写真部OBの詫間である。1951年の北羊社創立には臼井と、1952年の集団35創立には臼井・東松とともに参加している。

東区新出来町生まれの東松照明(1930～2012)は後にも先にも類例のない、わが国写真界の巨峰である。写真の出発はダダイズム、シュルレアリスムという名古屋アヴァンギャルドの影響を受けたものだったが、以後、生涯を通じてさまざまな対象に向き合い、多彩な表現を試みた。海外に取材した写真もあるが、ドメスティックな姿勢を貫くことで世界的評価を得ている。盛名に反して名古屋での大きな展覧会開催は遅かった。愛知県美術館「愛知曼陀羅—東松照明の原風景—」展が2006年、名古屋市美術館「写真家・東松照明 全仕事」展が2011年である。しかし「全仕事」展開催が作家の死去前年だったため、同展図録はこの写真家を概観する最良の資料となった。



臼井薫『想い出写真館 イガ栗、おてんば、ガキ大将』(郷土出版社、1993)
表紙モデルは子息の雅生君で、筆者の小中学校同級生。



「写真家・東松照明 全仕事」展図録(名古屋市美術館、2011)

現代の写真家たち

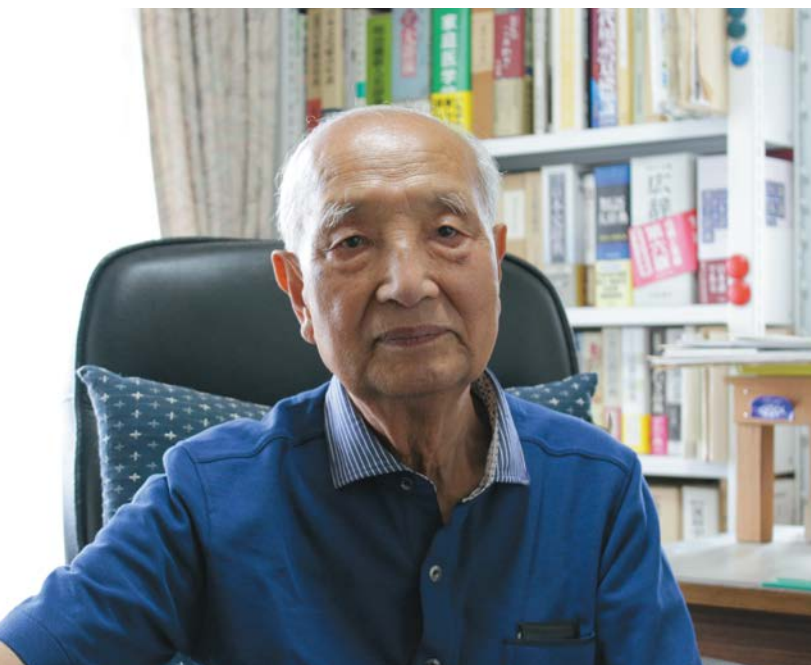
愛知県出身あるいは愛知県にゆかりの写真家は数多いが、在住作家は案外少ない。東松照明以来、県外で活動する作家が後を絶たないのは気になる。広告・出版業界が東京に集中しているのは大きな要因だが、発表場所の問題もあるだろう。

ビートルズ来日公演の撮影で脚光を浴びた浅井慎平(1937～)は瀬戸市生まれの名古屋市育ち。エッセイスト、テレビ・コメンテーターとしても活動。山岳写真家の水越武(1938～)は豊橋市出身で北海道在住。展覧会や雑誌などで積極的に作品発表をしている。加納典明(1942～)は名古屋市出身。主に広告業界や各種メディアで活動。過激なヌード作品で物議を醸したこともある。竹内敏信(1943～)は愛知県生まれ。自然の風景写真を得意とし、現在日本写真芸術専門学校校長。谷口雅(1949～)は豊橋市生まれで博多育ち。自主ギャラリーの先駆となる「PRISM」の設立メンバー。写真評論家、キュレーターとしても活躍。2002年から2012年まで東京総合写真専門学校校長。伊奈英次(1957～)は名古屋市生まれ。巨大アンテナのある風景、廃棄物、監視カメラ、天皇陵など社会的コンテクストに基づいた作品を発表している。現東京総合写真専門学校校長。櫃田珠実(1958～)は香川県高松市生まれの名古屋芸術大学教授。撮影したイメージをコンピュータ上で組み合わせプリントする手法で、現実風景の非現実化を図る。山田亘(1964～)は名古屋市生まれ。ビデオ、サウンドなどさまざまなメディアも使って多彩な表現をみせる。三田村光土里(1964～)は愛知県出身の現代美術家。物語を想起させる表現で、写真や映像がしばしば使われる。あいちトリエンナーレ2016への出展が決まっている。広瀬勉(1965～)は名古屋市生まれで東京都在住。2012年、清須市はるひ美術館で刮目すべき個展を開いた。赤瀬川原平と森山大道を師に持つ。20年前に「ブロック塀ばかり撮ってる男がいる」と赤瀬川氏から聞かされた、その当人。先間康博(1966～)は福岡市生まれで名古屋市在住。写真理論家でもある。10年以上津軽の林檎園に通い続け、大判カメラで林檎樹を撮影。さまざまな「問い」に満ちたイメージを提示する。橋本典久(1973～)は瀬戸市出身の写真家でメディアアーティスト。球体写真や超高解像度人間大昆虫写真なども制作。城戸保(1974～)は三重県伊賀市出身。初期のモノクローム作品では緻密な画面構成に惹かれたが、近年のカラー作品には「色彩選択の妙」も魅力に加わっている(本誌 No.362表紙口絵)。志賀理江子(1980～)は岡崎市出身。作り込んだ演出写真を制作。あいちトリエンナーレ2010と2013に出展した。



© Yasuhiro Sakima
「林檎 No.91 青森・弘前」(2012)

この人と...



愛知学院大学名誉教授 法学博士

はやし とう いち

林 董一 さん

現在を理解して将来を考える歴史家

愛知学院大学法学部で40年以上教鞭をとり、退職後も文化センターで10年にわたり「尾張藩史」の講座を続けてきた林董一先生。『新修名古屋市史』をはじめ、多くの自治体史の編纂にもなくてはならない存在。昨年12月にすべての公職を退き、いまは静かに随筆集の校正に打ち込む日々。戦後70年を迎え安保法案で揺れる夏の日、先生の食生活の一端を支える、仕事場近くのカフェテラス「さんりん舎」で、お話を伺った。

(聞き手:山本直子)

商家に生まれ、育つ

1927(昭和2)年8月18日、旧城下町碁盤割の七間町(現在の丸の内、錦)の商家で誕生。祖父が興した「岐阜東商店」は、屑銅を精製して時計屋や自転車屋に売ることを商いしていた。堅実な祖父は、最初にあげた利益を神棚にあげて感謝したという。

父は粹人で、舞踊、俳句、茶道、ゴルフ、小原村での紙すきと、いろいろな道楽に手を染めた。そんな父は、林先生にとって反面教師となった。母は旅行好きで、小学生のころ、金沢、東京、お伊勢参りなどに一緒に行った。旅行前には案内書をしっかり読んだ。案内書には各地の歴史がちりばめられていて、歴史に目覚めるきっかけとなった。

祖父が早く亡くなり父が二代目となったが、商売が甘く、林先生が小学校5年生のとき、ついに家業は行き詰る。裁判所から執行吏が来て、つぎつぎ家財を差し押さえた。本棚にまで札を貼ろうとする執行吏に向かって、母は気丈に訴えた。「それは子どものものです。学校に行けなくなります」。子ども心にも法律はこわい、法律には力があると感じさせる出来事だった。後年、先生は法学を学ぶことになる。

小学校卒業後は、商家の跡取り息子として当然のように市立名古屋商業学校(CA)に進学。ここで杉浦英一(後の作家城山三郎)と出会う。1年のクラスで副級長に任命され、級長に選ばれた杉浦と最前列で机を並べた。将来、彼の妹と結婚することになるとは夢にも思っていなかった。

CAに入学したのは1940(昭和15)年、戦時色がかなり濃くなっていた。母はCA後の進路として兵役猶予のある理科系の学校を強くすすめた。名古屋薬学専門学校(薬専)をめざすことになったが、CAでは受験に必要な理科系の科目は少なかったため、4年修了時に私立東海中学校に転入学。1944(昭和19)年のことだった。

語ることを避けてきた空襲体験

私立東海中学校への転入学は果たしたが、学校の授業はほとんどなかった。学徒勤労動員で、名古屋港の東、現在の港区大江にある三菱重工名古屋航空機工場で零戦づくりに明け暮れた。ここで、戦争のむごたらしさを味わうことになる。

「昭和19年12月18日だったと記憶しています。午後、警

戒警報が発令されました。こんなときは作業を中断、防空頭巾をかぶって建屋内の防空壕に避難することになっています。ところが、親友が『あぶない、外へ逃げよう』と誘ったのです。2メートル以上あった工場の塀を無我夢中でよじのぼり、全力で駆けました。堀川河口にかかる港新橋まで来たとき、空襲警報と同時に米軍機が編隊を組んで頭上に現れました。あわてて橋の下にもぐりこみました。爆弾が独特の音を立てて落下し、火花と土煙があがりました。まもなく空襲警報、つづいて警戒警報の解除、工場に戻りました。敷地内に一歩踏み込むと、そこは地獄でした。首がなかったり、手足がもぎとられたりした死体が散乱……。工場の塀をよじのぼらなければ、私の命もなくなっているところでした」

翌年には、一家で佐屋（現愛西市）に疎開しなければならなくなった。

「七間町の家も焼夷弾で焼かれました。本がたくさんあったので、それを井戸に入れておいたのですが、すべて焼かれていました。一面の焼け野原。リヤカーに焼け残った家財道具を積んで、歩いて知り合いのいる佐屋へ行きました」

こうした戦乱のなかで、1945（昭和20）年春、みごと名古屋薬専に合格。しかし、ここでも授業はまったくなかった。

「豊和工業が三重県上野市（現在の伊賀市）に工場を新設するとかで、穴掘りをしていました。家を離れてお寺で寝泊まりする毎日で、8月15日の玉音放送もここで聴きました。ちょうどお盆でお寺は賑わっていましたが、何が起こったのかはまったくわかりませんでした」

名古屋城山に住む

戦争が終わり、ようやく薬学の勉強が始まった。しかし、疎開先の佐屋から鳴海の学校までは往復6時間。この長

時間通学がたたって肋膜炎を患い休学。

1946（昭和21）年春、林家の貸家、千種区城山の住居に引っ越して、薬専へは自転車で通えるようになる。落ち着いて薬学の講義を聴き、実験に取り組んだ。このころ家の商売は立ち直っていて、市内の一等地栄（現在の丸栄百貨店の裏）に土地を取得、店を再開していた。父からここで薬局を開業するよう熱心にすすめられたが、その気にはなれなかった。どうせ将来は家業を継ぐのだから法律の勉強がしたいと父を説得し、ドイツ語と法学概論の勉強を開始。

薬専卒業後、1年浪人して1950（昭和25）年4月、名古屋大学法学部に入学。このころの名古屋大学法学部の学舎は名古屋城二の丸の旧歩兵連隊兵舎を転用したものの。校門ならぬ城門を通るとき、ふと尾張藩士の登城する姿を思い浮かべたという。

名古屋城とは縁が深く、小学生時代には毎日金鯱をながめていたそう。そのお城について意外な体験を聞くことになった。

「東海中学を卒業して薬専に入った年に、徴兵の予備検査がありました。佐屋に住んでいたため、空襲があって電車が停まるといけないから前日から名古屋に行けと母に言われ、家を出ました。名古屋駅に着いても泊まる場所があるわけではありません。しかたなく駅前にたくさん停まっていた人力車の下にもぐりこみました。そのとき、名古屋城の方向が明るく、火を吹いて燃えているのが見えました」

名古屋城が空襲で焼失したのは1945（昭和20）年5月14日。この日の夜のことと思われる。

大学入学後、薬剤師国家試験の勉強にも取り組んだ。午前はお城で政治学や民法、刑法などの講義を聴いたあと、名古屋市立大学薬学部の瑞穂区田辺通の学舎で学科試験、実地試験の講座に出席、努力はむくわれて晴れて薬剤師免許を手にすることができた。



仕事場では和室やキッチンも含め、すべての部屋を書庫として活用

大学時代は、店の手伝いもしていた。仕事は金庫番。メモされた1日の収支と金庫の中の現金が合うかどうか調べるという大切な役目だった。

平松義郎先生の教え



昼食で利用する「さんりん舎」にて

大学卒業後は商売を手伝うにしても、一度よその飯を食べて苦勞を経験してからにしたい、という考えに父の賛同を得て、大学から推薦してもらった企業を受験。

しかし、正直に肋膜炎を申告したため不採用。そのとき、大学の掲示板で日本育英会(当時)の「大学院研究奨学生」募集の案内が目にとまり、すぐに応募。研究科目は日本法制史。奨学金月額13,500円が支給され、研究室まで貸してもらえる。採用決定後、大学院に進みたいと父に打ち明けたところ、猛反対されたが、研究者の道をあきらめることはなかった。

1953(昭和28)年4月、指導教官となる平松義郎先生が東京大学法学部助手から名古屋大学法学部助教授として着任。平松先生の一番弟子となるが、年齢はわずか1歳下だけ。それでも、学者魂に貫かれた平松先生の指導はみごとに弟子の成長を促した。

「平松先生は私に日本法制史の手ほどきから、生活上の注意にいたるまで、親切に指示されました。『原稿は締め切りにおくれるな』『研究の途中ではテキスト(教科書)を書くな』『学会報告のときは誰よりも早く会場へ』『学部長にはなるな』『助教授就任まで結婚するな』どれも研究者として成長するために大切なこと、と胸に深く刻みこみました」

先生との約束で、一つだけ守れなかったことがあります。結婚です。銀行に就職した弟に縁談がもちあがり、母が長男の私があとになっては世間体が悪いと、叔母がもってきた結婚話をどんどん進めてしまったのです。大学院2年の1955(昭和30)年初夏に、結婚式を挙げました。相手は級友杉浦英一の妹、君枝です。本当は平松先生ご夫妻にご媒酌をお願いしたかったのですが、破門されてはいけないと思い、言えませんでした。

結婚の2年後、1957(昭和32)年4月、愛知学院大学創設の機会に、専任講師として教壇に立つことになりました。それから30年近い歳月が流れ、1984(昭和59)

年9月、恩師は亡くなられました。名古屋大学豊田講堂で盛大に営まれた学部葬で、妻とともにご遺影に深々と頭をたれました」

足輕書生、走る

大学院時代は史料探訪に飛び回った。文部省(当時)科学研究費のほとんどは旅費。公共交通機関以外はすべて徒歩。コピー機がある時代ではないので、史料はすべて鉛筆でノートに筆写していた。「若いころは月に一回、東京目白の徳川林政史研究所に通いました。この研究所は尾張藩、とくに藩領信州木曾山史料の宝庫です。新幹線のない時代で、しかも宿泊費節約のため日帰りです。午前2時半に起きて4時に家を出ます。本山から千種駅までは歩きます。千種駅はまだ開いていませんが、戸をたたいて開けてもらい、長野からくる寝台準急の切符を買って名古屋駅へ。タクシーに乗るより安いのです。名古屋駅をたしか5時7分発だったと思いますが、九州からくる寝台特急『あさかぜ』に乗るとちょうど10時に東京に着きます。途中、食堂車で朝日を浴びる富士山を見ながら朝食をとります。帰りは午後4時20分発の準急『東海』。6時間しかないので、東京駅に着いたら走ります。研究所での史料閲覧は無我夢中、昼食は抜き。当時の主任は所三男先生でしたが、私がいかにさわがしいので、『林がくるとまるで台風が襲来したようだ』と笑われたそうです。所先生は私に少しでも時間をと研究所研究員の資格を与えてくださいました。研究員ですと、書庫に自由に入って自身で検索し、必要なら閲覧室に持ち出して筆写できるのです。おかげで仕事が飛躍的にはかどりました。所先生も忘れられない恩師の一人です」

平松先生の助言で日本法制史のなかでも「近世法」を専攻し、最初の論文のテーマは戸籍法だった。処女論文「徳川幕府戸籍法研究序説」発表後は、尾張藩戸籍法を起点として、尾張藩法に限定して研究を深化させた。尾張藩領は尾張一国だけでなく、美濃、三河、近江、摂津、信濃木曾と広い。そこで、史料探訪に出かけるのも、愛知、岐阜、滋賀、兵庫、長野と広範囲になった。

「尾張藩法研究にあたり、いつも心がけたことがあります。それは、視点を尾張藩に限定するのを避け、常に幕藩体制の網のなかでとらえることです」

こうしてまとめた『尾張藩公法史の研究』で、京都大学から法学博士の学位を授けられる。学位取得後は、新しい分野を切り開くように勧められ、近世初頭の清須越しから太平洋戦争終結あたりまでの商人の活動、人脈、企業

の系列を総合的に考究する商人史に視線を向けた。出版元からの依頼で、まず通史である『名古屋商人史』をまとめ、その後、個別の研究を進めて『近世名古屋商人の研究』を上梓。

後進を育てる

愛知学院法学部の法制史ゼミでは800人以上の教え子が巣立って行った。毎年応募者が多く、面接をしてからゼミ生をとるので優秀な人材が集まった。

「最初のゼミ生が卒業するときに、何か記念になるようなことをしたいと考えました。当時、瀬戸の窯元で素焼きの陶器に字を書いて、それを焼いてもらったことがありました。なかなかよくできて、それに気を良くして、私の文字入りの焼き物を記念品にすることにしました。卒業生の数を青色の縦線にするのですが、この青には『青は藍よりいであ、藍より青し』、みんなは青だ、藍の先生を超えて進めという意味を込めています。そして、『一期一会』『無事是富貴』『日日是好日』といった言葉を入れます」

「大学院生には、古きを訪ねて新しきを知るという意味の『温故知新』にします。これは私の歴史に対する基本的な考え方です。歴史学は古いことさえ知っていればいいのではなくて、現在を理解して、将来を考えることが大切です。余談ですが、現在大学教員をしている娘が、私と同じように湯呑を焼いて卒業のときに渡しています。

徳川林政史研究所で出会った名古屋の大先輩、新見吉治先生とは祖父と孫ほどの年齢差がありましたが、歴史学の研究には、『温故知新』が大事と教えられたのです。そして、史学研究者は新しい頭脳の持ち主でなければと、新聞の精読をすすめられました。その教えに従い、全国紙、地方紙、経済紙の三紙を毎日約3時間かけて読み、必要なときは切り抜いていますが、そのスクラップブックが530冊にもなりました」

法制史ゼミは毎年女性が多く、全員が女性だった年もあ

るといふ。林先生の温かく、厳しい教えを受けた大学院生のなかから女性の法学博士も2名誕生している。

君枝さんとの二人三脚

平松先生の教えに唯一そむいてしまった結婚だったが、それで研究者としての信条が揺らいだわけではない。「新婚旅行は学割を使って2泊3日で関西へ行きました。1日目は妻に合わせて宝塚歌劇、2日目は法隆寺、3日目は伊勢神宮の神宮文庫で古文書を読みました。その間妻には週刊誌を与えておきました」

妻の君枝さんは、研究に打ち込む夫を真剣に支えた。土曜、日曜もなく1年360日は大学の研究室に通う林先生の昼食は、栄養士である君枝さんが栄養や彩りを考えてつくった「重箱」のような愛妻弁当。1日3食の献立も家計簿にしっかりつけていたという。

3人の子どもたちも立派に育てた。「子どもたちには無言の圧力をかけた」という林先生だが、自身の背中をしっかり見せていたにちがいない。愛知学院の学舎は自宅のある城山に近い。授業をしていると、長男が友だちと一緒に三輪車で遊びに来たりしたという。史料探訪で東京に出かけたときには、3人の子どもたちそれぞれが希望する本を買い求めて帰った。3人とも本が好きで、2人は大学で教鞭をとっている。

「結婚する相手が、中学の同級生、杉浦英一（城山三郎）の妹とは知りませんでした。結婚したとたん、お姑さんに『これからは兄弟なのだから、英一をお兄様と呼んでください』と言われ、これはこまったと思いました。ありていにいうと、結婚当初、これは初めて申しますが、私は杉浦のことを『兄上』、杉浦は私のことを『城山』とか『林さん』と呼んでいました。こんど出す随筆のタイトルは『名古屋城山にて』としました」

随筆集『名古屋城山にて』は、2010年2月に先立った君枝さんの七回忌に向けて出版される。林先生流の「喪の消化作業」により、君枝さんの思い出の品はすべて一室に片づけられている。アルバムももちろんその部屋にある。そして、先生は未だそこへは足を向けられないという。今回の記事になつかしい写真がない言い訳としたい。



博士号を取得したゼミ生が
上梓した書籍

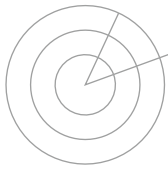


大学院生が卒業するときに贈る
記念品の湯呑



1992年、林ゼミの学生・大学院生に囲まれて

ピックアップ



「名古屋を彩る高校吹奏楽部」

高等学校の吹奏楽部は文化系クラブ活動の花形である。いろいろな種類の吹奏楽器がカラフルな音色でダイナミックに、時には繊細に演奏をする様子は感動的である。この名古屋地域でも合唱部と並んで人気の部活動。街中で楽器ケースを持ち運ぶ高校生の姿をよく見かける。その練習の熱心さは甲子園を目指す野球部に例えられるほどで、朝練、昼連、夜連と一年中ほとんど休みなく練習が展開されている。その活動の中心は、コンクールの頂点である、秋に開催される「全日本吹奏楽コンクール」での金賞を目指すこと。しかし、その道のりは極めて長い。名古屋の学校の場合、地区大会、県大会、支部大会、そして全国大会へと駒を進めなければならない。2015年の全国大会は名古屋国際会議場センチュリーホールで11月1日に開催される。東京の普門館から2012年に移された「吹奏楽の甲子園」は名古屋の地にあるのだ。



ドラムメジャーのバトンに合わせて

愛知県の全国大会常連の名門校は、愛知工業大学名電高等学校、安城学園高等学校、光ヶ丘女子高等学校である。この揺るぎない実力を誇る私立御三家に割って入ることは極めて困難な状況が続いているが、練習場や楽器、練習時間の点で私立と比べて確保が困難な公立学校にあっても、南区の愛知県立名古屋南高等学校吹奏楽部は東海地区大会の常連校として名古屋市内の公立高等学校の中で先頭を独走する存在だ。今年も8月30日に三重県文化会館で開催された第70回東海吹奏楽コンクールで見事銀賞に輝いた。

座って演奏する吹奏楽コンクールのほかに、行進や

ダンス的な振り付けを加えて演奏するマーチングバンドにもコンクールがあり、名古屋南高等学校(南高)はマーチングバンドを編成して参加している。日本ガイシホールで開催された愛知県マーチング大会では全36校が出場し、名古屋市立桜台高等学校、東邦高等学校などとともに金賞となり、東海大会への出場を決めた。南高のマーチング練習を取材したが、顧問の加藤真教諭からは、座奏だけでは得られないマーチングの演奏に及ぼす音楽的な効果や教育的意義について興味深い話を聞いた。

おとなしい生徒が多いが、座奏と違ってマーチングでは隠れることができず、常に積極的に自分からその存在を



アピールしながら周り 何度も繰り返すフォーメーションの確認とのコミュニケーションをとらなければならないので、自主的に動けるようになる。これが演奏の積極性と協調性を磨くことになるというのである。マーチングをすると演奏が荒れるとの意見もあるが、南高ではマーチングを活動に加えた10年ほど前から東海大会進出の常連校に名を連ねるようになった。生徒の主体性が演奏表現の多彩さにつながったのである。

フォーメーションの部分練習ごとに、指揮者であるドラムメジャーやセクションのリーダーから厳しい指摘が大声で飛ぶ。演奏しないメンバーもグラウンドに線を引く係などで参加して盛り上げる。その全体の躍動感には感動するばかりだった。社会的なマナーを身につけるにも吹奏楽部の教育的価値は高いと加藤教諭は強調した。コンクールの他にも様々な場面でマーチングを楽しめるので、注目してみたい。(W)

いとしの サブカル

名古屋のトキワ荘を目指したい!

漫画空間オーナー

内藤 泰弘

1958年 宮崎県生まれ。西南学院大学卒業。大学時代は漫画研究会に在籍。卒業後、教育系の出版社に入社。2010年長年勤務した企業を退職し漫画空間を大須商店街に開店し現在に至る。

5年前、漫画を描く人たちが交流できる場所を作りたい、漫画を描く人の裾野を広げていきたいと思い、大須仁王門通りに漫画が描けて読める漫画喫茶「漫画空間」をオープンしました。しかし、前例がない試みでしたので当初は果して漫画を描くお客さんが来るのか?と私自身半信半疑でした。3日目くらいに初めて描くお客さんが来たときは、まさしく「キタ〜!!」という感じでした。その後メディア等で紹介されたこともあり、少しずつ描くお客さんが増え始め、今では8割方は描きに来られるお客さんとなっています。

年齢層は幅広く小学生から60代の方までいらっしゃいますが、多いのは20代、30代の社会人の方々です。漫画家志望の方、同人誌を描いている方、プロで活躍されている方、これから漫画を描きたいという初心者の方までさまざまです。小学生の横でプロの方が漫画を描いているということもここでは珍しくありません。

いろんな方から漫画は家で描くものでしょう?外で描くのはどうしてでしょうか?とよく聞かれます。もちろん基本は家ですが、お客さんに聞くと家では誘惑が多くて集中できないとか、家ではだらけてやれないと言います。プロの方なんかは逆に家にこもってばかりだと誰かと話したくなるからたまにここに来ると気分転換になり作業が捗ると言われます。

漫画空間を始める前は分かりませんでしたが、名古屋というか東海地方には意外とプロの漫画家さんも多いんです。有名なのは鳥山明先生ですが、漫画空間に馴染みのプロ漫画家だけでも「究極!!

変態仮面」のあんど慶周先生、連載中の「巨蟲列島」原作者 藤見泰高先生、「逆転裁判」の前川かずお先生、「Another」の清原紘先生はじめたくさんの漫画家さんがいらっしゃいます。また漫画空間に通っているうちにプロデビューしたという方もいます。今年「学校に行けない僕と9人の先生」「マンガ うんちく名古屋」で話題になった棚園正一君はじめ数名います。また他にも新人賞を受賞した方、編集担当者が付いた方など後がたくさん控えていますので今後どんどんそれに続く方が出てくるといいなあと思います。

また、ここではお客さん同士の交流も大変盛んです。通っているうちにお互い話すようになり、漫画を見せあうようになり、そのうち毎月「ネーム見せよう会」を開催して刺激し合ったり、常連さん同士飲みに行ったり、気の合ったもの同士で同人誌を発行してイベントに参加したり…と漫画のワーキングスペース的な面もあります。



漫画空間

漫画は、たとえ棒人間の絵でもセリフとコマ割りでストーリーがあれば漫画として成立します。ですから難しく考えず、誰でも気軽に表現

できる媒体なのでもっともっと漫画を描く人が増えていくといいなと思います。漫画空間の役割として、そういった人たちに場所と方法と刺激を提供できればと思います。そして名古屋からたくさんの漫画家と面白い作品が出てくることを願っています。



やっとかめ
文化祭
MUSIC・DANCE・ART

やっとかめ文化祭 ～芸どころ・旅どころ・なごや～

「やっとかめ文化祭」は名古屋の歴史・文化の魅力を一堂に集めた、文化の祭典。全国初となる「辻狂言」をはじめ、多彩な伝統芸能の公演や、体験講座・ワークショップ、まち歩きなど、まちを舞台に、知られざる名古屋の魅力に出会う25日間です。

◆日 程：平成27年10月30日(金)～11月23日(月・祝)
◆主 催：やっとかめ文化祭実行委員会

＜構成＞名古屋市(文化振興室、観光推進室、歴史まちづくり推進室)、(公財)名古屋市文化振興事業団、(公財)名古屋観光コンベンションビューロー、中日新聞社、名古屋観光ブランド協会
特定非営利活動法人 大ナゴヤ・ユニバーシティ・ネットワーク

◆問い合わせ：やっとかめ文化祭実行委員会事務局(名古屋市文化振興事業団内) TEL052-249-9385

※事業の詳細は<http://www.yattokame.jp/>をご覧ください。

古典の日・文化の日記念
能楽堂に舞い唄う
「恋は神代の昔から」〈完売〉

青のゆらぎ ～LEDキャンドル能～

◆日時：11月5日(木)18:30～
◆会場：名古屋能楽堂
◆料金：一般3,000円 学生1,500円【全自由席】

演劇公演「乱歩からの招待状」

◆日時：11月12日(木)14:30～
13日(金)10:30～、12:30～、14:30～
14日(土)10:30～、12:30～、14:30～
15日(日)10:30～、12:30～
◆会場：東山荘
◆料金：一般3,000円 学生1,500円
【日時指定・自由席】

受け継がれる語りの世界〈完売〉

～名古屋で生まれた日本の楽器～
大正琴で聴く日本の音色

◆日時：11月20日(金)16:00～
◆会場：青少年文化センターアートピアホール
◆料金：1,000円【全自由席】



オープニングステージ

◆日時：10月30日(金)17:30～
◆会場：ナディアパーク2階アトリウム
◆料金：無料

芸どころまちなか披露

辻狂言、ストリート歌舞伎、長唄、箏曲、お座敷芸など、名古屋のまちなかで伝統文化に出会える各種ライブを開催。〈全53回〉
◆日時：10月31日(土)～11月23日(月・祝)
◆会場：大須商店街ふれあい広場 ほか

まちなか寺子屋

歴史的な建造物などで、歴史や伝統文化を楽しく学ぶ講座・ワークショップなどを実施。〈全32講座〉
◆日時：10月31日(土)～11月23日(月・祝)
◆会場：崇寛寺 ほか
◆料金：500円～4,000円

歴史まち歩き

名古屋の魅力を再発見する「まち歩き」を実施。
〈全40コース・48回〉
◆日時：10月31日(土)～11月23日(月・祝)
◆会場：市内各所
◆定員：各回20名
◆料金：500円

アイデアを広げる
ワンランク上の印刷を〇〇〇

事業内容

- UVコールドフォイル印刷
- UVホログラム転写印刷
- UVコーター付オフセット印刷
- 一般オフセット印刷
- 3D印刷
- バリアブル(可変データ)印刷
- Mac・Win・DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

鬼頭印刷株式会社 Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171
〒456-0073 名古屋市中区熱田区千代田町3-22 data@kito-net.com www.kito-net.com

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。

ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

20Hz ← → 20kHz

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区東区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

舞台音響・映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい

MP MANAGEMENT PRO 株式会社 マネージメント・プロ
〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営